
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第33号 2026年3月

元和7年に行われた徳川期大坂城石垣修築工事の組織と技術

The Management and Technology of the Tokugawa-era Osaka Castle Stonewall
Reconstruction Project in 1621

北野 博司 | KITANO Hiroshi

元和7年に行われた徳川期大坂城石垣修築工事の組織と技術

The Management and Technology of the Tokugawa-era Osaka Castle Stonewall Reconstruction Project in 1621

北野 博司 | KITANO Hiroshi

This paper examines the management and technology behind the response to stonewall collapses that occurred in sections of the Tokugawa-era Osaka Castle, which was constructed as a public works project. The Okahan Nakagawa clan organized a kachū-kumi (retainer group) consisting of nine mid-ranking samurai and 200 lowest ranking samurai for construction works, and hired an additional 100 day laborers at the site. The expenses for dispatching these retainers and employing the local labor force were borne by the daimyo's samurai according to their chigyō (fief). This system was common for military mobilization during the Sengoku period, and the public works project was carried out as a feudal military service based on a lord-vassal relationship. However, since the shogunate covered the costs for direct labor, it was not an entirely forced mobilization with the full financial burden on the daimyo. In response to the soft ground that caused the stonewall collapses, technical improvements were implemented, including redoing the foundation work and replacing the stone materials with longer ones.

Keywords:

公儀普請、石垣技術、大名家中組、土台木、根石
Kōgi-Fushin、Stonewall Construction Techniques、Daimyo Retainer Groups、Foundation Wood and Stones

1. はじめに

近世初期に諸大名を動員して行われた公儀普請は、将軍権力の確立、強化に大きな役割を果たした。動員された諸大名は幕府に対する忠誠心と奉公の能力を示すため率先してこれに参加したが、一方で人的資源の提供と膨大な出費を余儀なくされた。

白峰旬氏は公儀城郭普請を通時的に検討し、全国大名の動員形態や普請組織の変化を政治史、社会経済史、技術史など複合的な側面から論じている(白峰1998)。

また、江戸城、大坂城、名古屋城など個別の城郭では「普請丁場割図」や普請関係史料をもとに公儀普請の組織や技術について研究の蓄積がみられる(北原1999、石川県金沢城調査研究所2012、名古屋城調査研究センター2022)。

公儀普請の大名動員は「軍役(普請役)」という側面から、現場での不始末はお家の名誉、威信を傷つけ、最悪の場合、普請法度違反として処分の対象になりかねないものであった。そのような中で起こった普請場でのトラブルはさまざまあるが、最も顕著なのが石垣の変形や崩壊であろう。その際、大名たちはどのように対応したのであろうか。

本稿では公儀城郭普請における石垣の崩壊事例を取り上げ、その際に幕府と大名それぞれがどのように対処したのか。修築普請の組織や技術、経費負担等に焦点をあててその経過を辿っていききたい。

大名家にとって自身の丁場が孕んだり、崩壊して再築を余儀なくされることは最も不名誉なことであった。したがって当該大名家の年譜等にその事実が書き残されることはない。これまでの公儀石垣普請の研究は、本工事の組織や

技術に関する研究が対象で、石垣の変形・崩壊等に伴う修築工事を主題とした例はない。それは史料の少なさが主因とはいえ、修築工事は本工事に対して補助的、付随的なものとする認識があるからではなかろうか。公儀普請の全体像を復元するためには、修築、補修を含めたすべての工事を対象とする必要がある。また、修築工事がゆえに検討可能な技術論や公儀普請の性格をめぐる論点があり、そこに焦点をあてて検討することは意義のあるテーマと考えられる。

ここでは事例として比較的史料が多く現地の石垣が観察可能な徳川期大坂城を取り上げる。本工事は西国・北国大名50家あまりが動員され、元和6年(1620)、寛永元(1624)・2年、寛永5年(1628)の3期に分けて発令、施工された^(注1)。この間大名家にとっては石材調達の間も入れると約10年にわたり大坂城普請への従事を余儀なくされた。

本稿では、まず修築工事の動向を示す記録として岡藩中川家の史料を活用して、修築工事の経過をトレースしていく。岡藩中川家には16世紀末から幕末までの出来事を編年体でまとめた『中川氏御年譜(年譜・附録・別録)』が存在する。今回主として取り扱う『中川家記事』は文化・文政期に『中川氏御年譜』作成の基礎となった史料ノート集のような冊子(全38冊)で、一次史料である実務担当者らの書状を編集した「状留」「状留抄録」をさらに筆写したものとされる(竹田市歴史資料館2010)。記事の多くが書状形式を保って筆写されており、編纂史料とはいえ内容への信頼性は比較的高いものと考えられる。一次史料が現存しない中で貴重な情報源といえよう。なお、本文中の中川家記事の引用は、竹田市教育委員会編2011『岡城跡石垣等文献調査報告書』の史料番号を用いる。随時、傍証となる諸大名家の史料を参照し、これらから史料的事実を復元する。

次いで、現地に残る当該箇所の石垣を観察し、両者を突き合わせながら、本事例における修築工事の初動対応、施工体制、補強技術、費用負担などについて明らかにしていきたい。石垣の壁面番号は村川1962を参照する(図1)。

2. 元和7年修築工事の経緯と経過

(1) 経緯

元和6年に実施された第1期工事の後、崩壊等によって翌年に修理された石垣は3か所ある。1つ目は東外堀の本石垣で松平忠直(越前)の丁場、2つ目は玉作口の水敲石垣で伊東祐慶(日向)・中川久盛(豊後)・島津忠興(日向)の丁場、3つ目は京橋口北側の本石垣で池田光政(松平新太郎、因幡・伯耆)・毛利高政(豊後)・生駒正俊(讃岐)の丁場である^(注2)。なお、第1期工事で築かれた東外堀のうち、堀尾吉晴(出雲)・山内忠義(土佐)の丁場、越前松平家の丁場^(注3)は第2期工事の際に修築されているが、これらは本稿では対象としない。

第1の越前丁場(97号壁)の崩壊は、元和6年9月2日、黒田家下奉行竹森清左衛門から黒田長政あてに一報が入られた^(注4)。第1期工事の終盤であり、衆目を集めたはずであるが、今のところ傍証史料には恵まれない。

第2の玉作口水敲石垣(90号壁)の崩壊は、元和6年閏12月のことで、同8日にはすでに幕府関係者の知る所となっていた^(史130)。閏12月といえば、第1期工事が竣工し、中川家の普請衆が掃除普請を終え追々帰国している最中であつた^(史123)。藩主久盛は11月に岡城を発って、12月半ばに大坂・伏見を経由し、閏12月5日に江戸に着いている。

第3は京橋口の北側、池田光政(32~36号壁)、毛利高

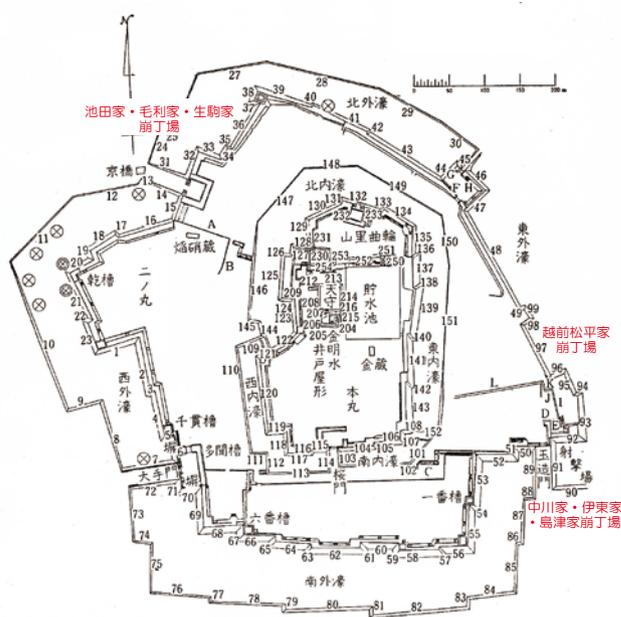


図1 元和7年に修築された石垣(村川1962原図)

政(36号壁)、生駒正俊(36~38号壁)の本石垣で、4月6日の中川家家老から池田家家老への書状に「京橋口新太様御石垣、当春破損仕由」(史165)とあり、2月21日付書状にすでに「御相役」に名前があることから、1月ごろには破損が判明していたものと考えられる。

修理範囲は越前松平家の丁場が地口35間、中川家が10間、池田家が15間、毛利家が4間、生駒家が15~16間(史155・161・168)であった。



写真1 東外堀越前松平家崩丁場(北端)



写真2 玉造口水敵中川・伊東・島津家崩丁場

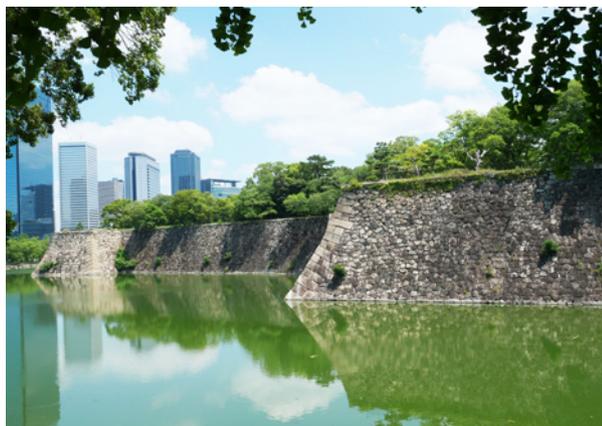


写真3 西外堀池田・毛利・生駒家崩丁場

(2)経過

玉造口水敵石垣は第1期工事で中川家が14間3尺、伊東家が13間、島津家が7間(国立国会図書館「大阪御城之図」)を担当した^(注5)。石垣は伊東家丁場から崩れ、その影響で中川家の丁場も過半が崩壊し(史125)、東側の島津家の丁場にも崩壊は及んでいた^(注6)。

まず、工事経過全体のスケジュールをみておく。1月27日に中川家の下奉行として池田助三郎・進藤長佐衛門・古田三七郎の3名と組頭の土屋源右衛門、普請衆200名が岡を出立、2月11日に大坂に着く。穴太として石太夫・又兵衛の2名が同行した^(史148)。

下石勘右衛門、小島志摩介は遅れて2月2日に国元を出立、2月15日に大坂に上着した^(史155)。幕府側の責任者は大坂町奉行久貝忠左衛門で下石らは到着早々に指示を仰いでいる。幕府普請奉行花房志摩・長谷川式部・日下部五郎八は江戸を出て、2月27~28日に大坂に着いている^(注7)。2月晦日に堀の水抜き工事に着手、3月2日から堀に崩れ落ちた石材、土砂の撤去が始まった。3月半ばになると工事は急ピッチとなり、日用600~700人(延人数か)が投入される状況となった。根石残置とする当初の方針が変更となり、土台等を取り外して根切を深掘りし、4月4日から根石の再設置工事に取り掛かった。普請衆は日用100人を加えた300人態勢とし、4月12日時点で6間ほどが積み上がり、5月20日に竣工した。崩落石材の撤去から根切・土台の再設置まで約1か月、根石設置からは積み上げまで約1月半の工事であった。なお、越前松平家の工事完了は5月10日頃、4月23日時点で「新太様御丁場新角三通御積被成候、毛利伊勢守殿同前御座候」(史173)とあり、池田家・毛利家ともほぼ積み終わっていた。しかし、生駒丁場は難航し、根石を一通り据えた状態で、仕廻は6月中と予測されていた^(注8)。

崩落について中川家では、現地に立った下石らが「うら土悪候て崩申候間、今度ハ丈夫ニ入可申候条、百四、五十坪も入可申候哉」として裏土の不良が崩落原因と推量し、その改良を示唆している^(史156)。雨水等による裏土の土圧で石垣が崩壊したものと考えられる。

元和5年12月15日、第1期工事を前にして現地を下見した吉田作兵衛は「来年之御普請様子見及申候処、ね石場殊外水多ク御座可有候」と国元へ報告^(史81)しており、基礎地盤が軟弱なことに当初から懸念を示していたことは注目される。

3. 豊前中川家の石垣普請

(1) 初動と大名家間の連携

中川家の石垣崩落の第一報は大坂にいた下石勘右衛門から各方面へ伝えられ、田中勘右衛門が国元に下る(閏12月21日岡に帰着)とともに、下石は在坂の伊東家家老と協議(島津家は留守居が対応)、事態の対応にあたった(史125)。国元では急ぎ隣接丁場担当の伊東家、島津家に飛脚を遣わし、宿老らと協議に取り掛かり(史126・129・130)、その様子は23日に江戸の藩主側近と留守居らに報告された(史131・132)。国元では正月2日に下向した下石から具に状況を聞き、5日に協議内容を江戸に報告するとともに、上坂した侍の監察と銀子の出納のため横目任命の依頼と来年の普請にかかる石切の開始時期(注9)を尋ねている(史152)。10日、14日に島津家、伊東家(注10)からそれぞれ書状が届き、家老と上坂時期や普請体制を確認、中川家では自身(下奉行)3人、普請衆150人(うち手木40~50人)、残りは日用をあてると藩主側近に伝えている。

幕府は当初から大坂東町奉行の久貝忠左衛門(正敏)が対応にあたり、幕府普請奉行に先立ち江戸から上坂した野崎十左衛門が中川家、伊東家らとの連絡調整にあたった(注11)。修築普請の着工時期は、野崎を通して3月2日と伝えられた。石垣崩落という緊急事態に際し、幕府側は在坂の大坂東町奉行・久貝が指揮を執り、普請方の野崎が大坂に出て国元の家老らと普請計画について書状を交わしていた。江戸にいた大坂西町奉行嶋田清左衛門(直時)も1月27日には大阪に到着している(史156)。

大名家側では、責任者が大坂で対応にあたるとともに、国元へ状況を伝え、家老らは江戸屋敷(藩主)の指示を仰ぎながら、普請計画(出役人数、出立日、経費等)を練っていった。同時に国元ではいち早く隣接丁場の大名家間で情報交換していたのは先にみたとおりである(注12)。それだけでなく、中川家では相役となった池田光政家の家中(芳賀大蔵・熊谷十左衛門)に書状を出して、中川家丁場への指導を依頼している。4月6日付芳賀あて「万端御見及之通御指図奉頼存候」、熊谷あて「万事御指南頼入存候と述べ、技術面ほか全体的な助言を求めたものとみられる。「去年中八切々御六かしき儀共申入」(史165)の文言からは第1期工事の際にも中川家は池田家を頼っていたことが分かる。それは光政祖母の縁が久盛の叔母にあたるという両家の縁戚関係(注13)が背景にあり、中川家が池田組に属し

たのもそのような理由であろう。縁戚を頼りとして修築工事をできる限り円滑に進めようとする意図が伺える。

下石と小島が大坂に到着した2月15日には越前の普請衆(本多飛騨守他、普請奉行2名)も同日に到着しており、すぐさま両家で談合し、中川家同様、昨年の残石を丁場に搬入中であることを確認している(史156)。到着早々、相役の大名家と接触し、情報収集していることがわかる。

(2) 中川家の普請組織

家老の出役 中川家は第1期工事では元和5年12月に家老の中川加賀が(史83)、正月5日には主馬が鉄砲頭の池田雅楽・中川勘解由とともに上坂(史86)し、老職2名が現場で指揮を執った。家老並の中川采女も1月18までに上坂している。寛永元年の第2期工事では式部と主馬が(史252)、寛永5年の第3期工事では式部と主水(史346・347)の2名が上坂した。これら3期の本工事に対して元和7年の修復工事では家老は現地に出役せず、国元から下奉行らを指揮した。

大名の出役 元和6年2月19日の大坂にあった中川加賀・主馬から国元への書状に「御大名衆大坂ニ御詰候事、尔今其沙汰無之候」とあり、大名自身の出役についていまだ幕府から指示がないとしている(史103)。大坂城普請において、幕府は主たる大名の出役を「自身御上は御無用」と禁止したが、中小の大名の間では慶長期の先例従い大坂に向いた者が少なくなかった(木越2012)。藩主中川久盛は3月晦日に岡を立て大坂に上り、普請にかかる指示を済ましたのち、4月20日に大坂を出船して国元に戻った(史107)。久盛は普請場に滞在して指揮するのではなく、「当座の見廻り」として大坂に上ったもので、寛永元年の第2期工事(2月1日鋸始)でも3月20日に岡を発ち、4月2日に大坂の普請場を見分、4日に伏見に着座している(史257)。これに対し、元和7年の修築工事では、久盛は江戸にあったため上坂していない。4月11日、修復工事に関わった松平新太郎(池田光政)、中川内膳正、伊東修理大夫、島津右馬頭に帰国の許可が下りたと江戸留守居から報告があり(史167)、修復工事が終わった元和7年6月14日に正式に帰国の許可が出た(史177)。伏見を経由して国元に戻ったようである(史170)。

奉行・普請人 中川家は公儀普請にあたり国元から、侍格の下奉行(自身)、足軽を中心とした普請人足を派遣した。これに石積み技能者穴太と、鉄道具のメンテナンスを行う鍛冶が伴った(注14)。修築工事では前年の元和6年閏12月23日に家老から江戸の藩主と留守居あてに自身6名、鉄

表1 元和7年中川家修築工事の経過

月	日	史料番号	記事	差出人	宛所
12	27	122	秀忠から工事完了に対する御内書が届いたことを報告。	(家老)	柳原太郎兵衛(藩主側近・使番)
閏12		123	第1期工事はほぼ完了し、出役ノ者たちが追々大坂を出立し岡へ帰着。御年譜第四		

元和7年修築工事

閏12	23	125	下石勘右衛門から石道崩落の第一報、国元に戻った田中勘右衛門の報告を聞き、中川家の修築普請計画を江戸と藩主側近に報告。役の者は正月5日か8日に立出できるよう準備している。	(家老)	柳原太郎兵衛 牧兵部
1	5	126	正月2日朝、下石勘右衛門下向。伊東、嶋津両家に普請衆を上坂させる日を問い合わせているが返事待ち。1月20日頃に自身2、3人、少数の普請人を派遣する計画。今回の普請にかかる横目、来年の普請に伴う石割の開始時期について指示を仰ぐ。幕府横目衆(花井勝右衛門・朝比奈源六)が年内に江戸へ帰着することを報告。	加賀・隼人・主馬・式部	柳原太郎兵衛 牧兵部・古将監・桜斎宮
1	10	129	嶋津家家老松山清右衛門から普請衆上坂時期の問い合わせ。	松山清右衛門(嶋津家)	主馬・采女・加賀
—	—	返書	1月20日頃140~150人、奉行の者2、3人が上坂予定。不足分は日用で対応。	主馬・采女・加賀	松山清右衛門(嶋津家)
1	14	130	復旧工事に際して伊東家の手順・人数などを報告。先書で10日頃に立出とされていたが順風なく、18・19日には出船できるか。伊東家の普請衆は300人、嶋津家は150人。	伊東主馬首(伊東家)	采女・主馬・加賀
1	14	134	幕府方から玉作石垣の普工は3月2日。それに合わせ幕府奉行は上坂。中川家の普請衆の上坂時期や人数について問い合わせ。	野崎十左衛門(在大阪)	主馬・采女・加賀
1	16	131	準備状況の報告。1月20日頃に普請衆150人、うち手木の者40~50人、自身3人が上坂。残りは日用で対応する予定。伊東家・嶋津家とのやり取りの写を提出。	(家老)	柳原太郎兵衛
1	16	132	同上。幕府將軍から指示があるまで待機。必要な銀子15貫のうち殿様より5貫、家中より10貫。	(家老)	牧兵部・古将監・桜斎宮
1	18	133	普請に動員される鍛冶の切米の算用。	加賀・采女・主馬	武伊織・牧左近
1	20	134	野崎十左衛門への返書。1月25、6日頃に普請衆200人、下奉行3人が上坂。その他は日用で調整したい。	加賀・采女・主馬	野崎十左衛門(在大阪)
1	21	135	130の返書。中川家の普請人数、期日などを報告。大石・栗石が不足するので石場から玉作へ奇石。	加賀・采女・主馬	伊東主馬首(伊東家)
1	21	136	家中負担の入用銀11貫(先の10貫に1貫追加)の割符を指示。日用銀の定。2月2日追っかけ普請衆50人上坂。	加賀・采女・主馬	吉田四郎左衛門・塩山三郎右衛門・塩山太左衛門
1	21	137	大坂組頭月番について往復書簡。国元では加賀としたが、加賀は舎人を1番とするように返事(1月22日)。	池大蔵・武伊織・菅大学・池蔵人	加賀
1	26	140	土屋源右衛門・池田助三郎・進藤長佐衛門・古田三七郎が27日に上坂。昨年の大石・栗石の預かり状を4名に渡すよう指示。	加賀・隼人・式部	下石勘右衛門
1	26	140	鉄砲衆45人の兵糧を大坂で支給してほしい。(追書)先の銀子は貴殿に渡したうえで、土屋源右衛門・小島志摩介・下石勘右衛門へ切手で支給。	加賀・隼人・式部	小原勘兵衛
1	26	141	派遣される侍衆9名による誓詞前書(起請文)。	土屋源左衛門・池田助三郎・古田三七郎・進藤長左衛門・小島志摩介・下石勘右衛門・山本左太郎・上孫左衛門・田伏八太夫	—
1	26	142	下奉行衆の分担。山本左太郎は栗石・鍛冶、池田助三郎は日用・万貫物。	—	—
1	27	143	普請に用いる鍛冶道具等の引き渡しについて、浜に燃るべきものを出して自身衆にお渡し。	加賀・隼人・式部	大田平大夫
1	27	146	普請の定。普請道具の使用規定。刀・脇差は所持禁止だが自身衆の預かりは可。源右衛門が責任者だが3人の自身衆で相談して手廻しすべし。源右衛門が公儀に出る際は誰か一人が同心すること。大石は玉作口に寄せ、栗石の不足分は調達しておくこと。伊東家との丁境壊の崩れ石の取扱いは後から上る衆が来てから相談。普請法度を書面にして堅く守らせること。	加賀・隼人・式部	土屋源右衛門・池田助三郎・古田三七郎・進藤長左衛門
1	27	152	普請衆200人、自身3人、組頭1人立出(史153)、史156では1月28日とある。	—	—
2	1	147	慶長8年江戸城普請の際の路銀が未だ未精算であった3人について今回の大坂城普請の割符の内て処理。	主馬・隼人・加賀・式部	池田市郎右衛門・塩山三郎右衛門・塩山多左衛門・上兵太夫
2	1	148	穴太2名に殿様からの扶持(合力)の外に大豆1石5斗を納升にて支給。	主馬・加賀・隼人・式部・采女・牧縫殿・牧左近・武伊織	池大蔵
2	2	返書	穴太からの上申につき大豆支給につき兩人に切手を発行。	池大蔵	主馬・加賀・隼人・式部・采女・牧縫殿・牧左近・武伊織
2	2	150	定(普請法度)12項目の法度。銀子22貫の内7貫は100人の日用分。銀子不足の際は大坂で才買すべし。伊東家境の崩落石材・栗石の所屬は相談して決めよ。石垣は三番とも一縄なので造作・入増等は禁止。万事小志摩・土源右・下勘右御自身衆相談が肝要。各大家の自身衆の様子も見て判断。道具の不足分はまとめて調達すること。他所から干渉があった場合も相談のうえ然るべく対処すること。法度違反、喧嘩はその様子により成敗、曲事も吟味次第。自身衆に対して下々が不届きをすれば曲事として処罰。公儀穴太・大工への贈答品を見繕い行うこと。幕府横目については江戸から指示がある。	主馬・隼人・加賀・式部	小志摩・土源右衛門・下勘右衛門・三孫左衛門・池助三郎・進藤長左衛門・古三七郎・田八大夫・山左太郎
2	2	151	銀子不足の場合は大坂にて借銀すること。	主馬・隼人・式部・加賀	小原勘兵衛
2	2	152	下石勘右衛門、小島志摩介、ほか3名が出立。	—	—
2	3	150	小鉄砲48人、7厘6毛の割で上らせたので兵糧を支給してほしい。先の45人分に追加して毎月渡すこと。その他人足の兵糧は鉄砲衆4人分、8分7毛の割で支給。大豆は1人に付き1日7合5勺。	主馬・加賀・隼人・式部	小原勘兵衛
2	5	152	御院のごとく普請衆300人のうち200人を27日に派遣。残り100人分の日用銀7貫を上げた。崩れた石垣の境目の検証のために昨年の自身池田助三郎らを上坂させる。下石勘右衛門と小島志摩介は2月2日に立出している。来年御普請につき当年より石切。日用にて対処したい。	主馬・菅入・隼人・加賀・式部	柳原太郎兵衛
2	5	153	普請衆300人、鉄砲頭1人、自身5人の御院。27日に普請衆200人、自身3人、組頭1人(土屋源右衛門)を派遣。残り100人分の日用銀7貫を小志摩介・下勘右に渡し兩名は2日に上坂。	主馬・菅入・隼人・加賀・式部	古将監・桜斎宮
2	6	155	(史156) 下石勘右衛門豊前萩原出船。御年譜第四	—	—
2	11	155	(史156) 御普請御用の自身衆ら、大坂着。御年譜第四	—	—

2	13	155	(史 156) 自身衆は久貝忠左衛門(大坂町奉行)に会い、指示を受けて担当丁場 10 間を確認する。この日から去年の残石を玉作口の丁場へ運搬。御年譜第四	—	—
2	15	155	(史 156) 下石勳右衛門大坂上着。御年譜第四	—	—
2	15	155	(史 156) 越前の御普請衆参着。越前の奉行衆と打ち合わせ。御年譜第四	—	—
2	17	155	(史 156) 久貝忠左衛門、越前衆・中川家の普請衆が揃ったことを次飛脚で江戸に注進。幕府普請奉行が近日大坂に参着すること通知。好天につき崩落石材・くり石等の撤去に取り掛かりたい旨打診するが、返事は未着。御年譜第四	—	—
2	21	156	①現場から国元への進捗状況の報告。越前衆・伊東家・嶋津家の普請衆の参着と現地作業の様子。石垣崩落原因を裏土が悪かったと推量。栗石代銀は昨年比に比へ半値。日用銀は 1 日 7~8 分。松平新太郎・生駒謙岐守・毛利伊勢守(京橋口の丁場)の普請衆も参着。早速山から大石・栗石を出す作業に取り掛かる。藤堂和泉守は来年の普請のために小豆島で石切、2~3 組で淀・鳥羽から大坂へ石を寄せる。中川家普請衆の宿は当年宿賃安く札之辻近辺で借家(昨年は玉作で小屋掛け)。	下石勳右衛門	加賀・隼人・主馬・道夫・式部
2	27	159	(古状留) 27、8 日頃に御普請奉行花房志摩・長谷川式部・日下部五郎八大坂着座。3 月 17 日書状に戸田左門の名も見ゆ。	—	—
2	29	155	史 155 御普請場、公儀衆ご見分のうえ、中川家出役のものに急ぎ堀の水抜きにかかるよう指示。御年譜第四	—	—
2	30	155	御相役の御家衆と申し合わせ。水抜き工事の作事始まる。御年譜第四	—	—
3	2	158	大坂玉造口総て堀水を引落す。御年譜第四	—	—
3	3	159	②堀の水位が 2 尺ばかり下がる。堀に落ちた石を昨日から引き上げ。越前衆も普請を急ぐ。公儀普請奉行申すには「根石が残ってれば残置し、その上に積み上げよ」。	小嶋志摩介・土屋源右衛門	式部・隼人・加賀・主馬・道夫
3	4	160	史 156 への返書。国元では下石の報告に安堵。引き続き逐一報告するよう求める。	主馬・菅入・隼人・加賀・式部	小志摩・土源右衛門・下石勳右衛門・上孫左衛門・池助三郎・山左太郎・進長左衛門・田八太夫・古三七郎
3	17	161	③現場から工事の進捗状況の報告。普請がにわかに急ぎとなっている。根石工事の方針が変更となり、期限も早まるなか、幕府奉行衆から叱責を受けながら昼夜なく情を入れている。国元からの出入は彼程引かれて 166 人。日用を 1 日 600~700 人投入。相役の越前宰相家、松平新太郎家、生駒家、嶋津家、伊東家の各丁場の普請の様子について報告。幕府普請奉行からは 3 日に 1 度江戸に報告がなされている。	下石勳右衛門・小嶋志摩介・土屋源右衛門・進藤長左衛門・上孫左衛門・古田三七郎・田伏八太夫・山本左太郎・池田助三郎・三嶋半右衛門	加州・道夫・隼人・主馬・采女・式部
4	1	162	15 日までに 10 貫目必要。出銀について殿様が 3 貫目、家中割符が 7 貫目。5 日に本郷が大坂に行くので当面の分として 5 貫目(お姫様銀を借用)を送銀。のちに家中に割符。	隼人・加賀・式部	塩三郎右衛門・吉四郎左衛門・塩多左衛門
4	4	168	根切が完了し、根石設置に取り掛かる。御年譜第四では 5 日(史 163)。	—	—
4	5	164	史 161 への返書。日用を大勢雇い入れてつつ作業が遅いことに対して、できる限り近所並みに作業するよう指示。状況を心配し、本郷伊左衛門を派遣。銀子 10 貫目の求めに対して工面が難しくまず 5 貫目をもたせる。	隼人・主馬・采女・加賀・式部	小志摩・下勳右・池助三・田八太夫・進長左・松口口・山左太郎・古三七・土源右
4	6	165	京橋口の池田家丁場の石垣破損を見舞い、同時に中川家丁場への指導を依頼する。	隼人・主馬・采女・加賀・式部	芳賀大蔵(池田家)
4	6	165	同上	加賀・采女・主馬	熊谷十左衛門(池田家)
4	11	167	藩主下向への許可が下りたことを知らせる。尚書に同時に池田光政・殿様(中川久盛)・伊東祐慶・嶋津忠興も。	池田監物・牧左近・武伊織	菅入
4	12	168	高さ 6 間ほど積み立て。	—	—
4	13	168	④現場から工事の進捗状況を報告。中川家の施工状況(裏裏幅等)を詳細に記載。幕府からの扶持米一人一日五合あて支給。工事を急ぐため過分となった日用銀 3、4 貫目の送付を求める。工事完了は 5 月 20 日ごろの予定。越前衆ほか御相役の丁場の進捗状況について報告。藤堂家が讃岐殿の丁場に合力として 800 人投入。殿様の上洛日については今月 2、3 日ごろか、来年の普請はないとのうわさ。とはいえ、万々より小豆島に石切に入っている。	小嶋志摩介・下石勳右衛門・大嶋半右衛門・土屋源右衛門	加賀・隼人・道夫・主馬・采女・式部
4	21	173	御普請見回りのため本郷猪左衛門が大坂に到着。	—	—
4	21	169	国元から現地へ進捗状況を知らせるよう書状。工事が予想外に大規模になり国元では苦々しく思っている。	(家老)	(現地)
4	21	170	国元から藩主下向の際は伏見から連絡を入れるように要請。	御家老四人・道夫・加賀	牧兵部・池蔵人・武伊織・牧左近・桜斎宮・古得監・池大蔵
4	21	171	昨年の江戸城普請にかかる家中割符当て銀の割符について。	隼人・加賀・式部	塩多左衛門・吉四郎左衛門・塩三郎右衛門
4	21	172	船の経費、賄い方に支払う銀がない。工事完了時期は 5 月 20 日ごろと報告。	小原勘兵衛	(家老)
4	23	173	⑤4 月 5 日付の書状(史 164) が 21 日に到着。5 日に国元を出発した本郷猪左衛門が大坂に到着、銀子 5 貫宛を受け取った。中川家および、越前衆ほか御相役の工事の進捗状況を報告。中川家の丁場は完成まじか。幕府普請奉行は想定していた二~三十日も早いと喜んでいる。越前丁場は 5 月 10 日頃、新太郎・毛利は 3 段程度積み、讃岐殿は根石 1 通り置いた。6 月には竣工の予定という。殿様は 17 日に江戸を出立、近日上洛の由。	小嶋志摩介・下石勳右衛門・土屋源右衛門・池田助三郎・上孫左衛門・近藤長左衛門・田伏八太夫・山本左太郎・古田三七郎・三嶋半右衛門	隼人・道夫・采女・主馬・加賀・式部
4	28	174	史 168 への返書。5 月 20 日頃の竣工見込みに安堵。	(家老)	大坂御普請掛り之衆
5	10	175	本郷を通じて差し上げた 5 貫目の銀子の家中割符について、大坂普請終了後とすることを通知(史 162 では 5 月 15 日期限)。	加賀・菅入・主馬・隼人・式部	森七左衛門・沢安大夫
5	20	176	大坂御普請相済む。御年譜第四	—	—
6	14	177	藩主中川久盛の帰国命令が幕府年寄から下りたことを国元の老職に伝える。	牧縫殿	式部・加賀・主馬・菅道夫・池監物・池蔵人・古得監・桜斎宮・武伊織・牧左近・采女

第 2 期工事のための石切

6	20	178	石の調達のために派遣される藩士への路銀について。	式部・隼人・加賀	塩多左衛門・吉四郎左衛門・塩三郎右衛門
6	26	179	大坂城石垣普請準備につき国元から現地へ指示。	—	—

砲頭1人、組頭1人、普請衆150名、足りない場合は現地で日用を雇用するという方針が示された。(国元からの書状が江戸に到着する前の)正月5日に、久盛は国元にあて普請人足300人・鉄砲頭1人・自身5人を急いで差し上げるよう指示していた(1月26日国元に到着)。しかし、国元ではすでに家老らが相談し、1月27日に普請衆200人、自身3人、組頭1人を大坂に差し向けることとし、残り100人分については、来年の普請(第2期工事)のために石の割当があることを想定し、石丁場へ派遣する用意として見送った。その分は日用をあてがうと藩主に報告している^(史153)。江戸と国元では書状のやり取りにタイムラグがあり、実際には国元の家老らの合議で派遣計画が進められていた。

1月26日に派遣される自身9名(土屋源右衛門・下石勘右衛門・池田助三郎・山本左太郎・古田三七郎・上孫左衛門・進藤長左衛門・田伏八太夫・小島志摩介)による誓詞が取り交わされた^(註15)。

中川家は土屋源右衛門が組頭^(史152・153)、公儀に出る奉行)、池田助三郎・進藤長左衛門・古田三七郎の3名が下奉行^(史146)を務めた^(註16)。この4名は1月27日に普請衆200名、穴太2名(石太夫・又兵衛)とともに岡を出立し、2月11日に大坂に着いた^(史148)。下石勘右衛門(第1期工事にも参加)、小島志摩介と他3名の自身衆は遅れて2月2日に国元を出て、2月15日に大坂に上着した。上坂した侍衆のなかから横目役を任命するよう藩主に依頼^(史152)しており、いずれかがその任にあったとみられる。

1月27日に出立した普請衆200人^(註17)は中川家の組足軽や家中から知行に応じて徴発された奉公人^(註18)とみられるが、そのうちには45人の鉄砲衆・手木者^(註19)が含まれていた。石垣普請では各大家で鉄砲衆が重要な役割を果たした^(註20)。彼らは体力に優れ、土木工事の技量に長けた者たちとみられる。

上坂した普請衆は「玉作ニこやをかけ可申かと申候へ共、当年ハ宿銭等も下直ニ御座候間、こや道具相調申候よりハ、町屋かり申手廻可然旨各相談仕」として天王寺口の「札之辻」付近に町屋を借りて宿所とした^(史156)。元和6年の本工事では普請現場に近い玉作で小屋掛けしたようである。

普請衆の編成と番方組織 鉄砲足軽を含む数百人の普請衆はどのように編成されたのであろうか。17世紀初頭、中川家の番方は譜代の田近、戸伏、熊田、古田を筆頭とする4組に編成されていた(入江2011)。第1期工事では国

元家老から現地の中川加賀への書状に「三番わり普請ニ被成候御ハ、切田取にて人之高下指引被成、御かわり可被成候、高下御座候てハちわりも六ヶ敷故、申ぶんニ罷成、三番共ニ高下無御座候へハ、申ぶん無御座候事」^(史96)とあり、普請衆は3組(三番わり)に編成され、「切田取(工区割の意か)」により各組の人数を揃え、意義(申ぶん)が出ないように配慮している点が注目される。

また、工事が難航する中、7月には不足する銀子について家中からの徴収を100石あたり100匁とし、式部番(田近)・加賀番(戸伏)・隼人番(熊田)の各家臣に割符している^(史115)。普請の際には番頭を筆頭とする普請組が編成され、知行高に応じて家中に割符された普請人足、銀子を抛出した^(註21)。

元和7年2月3日、国元家老から現地の小原勘兵衛へ「石垣三番共弥一なわニ被仰付可被入御念」とし^(史150)、三番組が勾配等の基準をそろえるよう指示にしている。普請道具の手配^(史146・150)や日用賃銀の調達^(史152・153)も三番組を単位としており、普請に関わる人・モノ・金の調達が家中の「公平な役負担」という原理によって貫徹していたことがわかる。

(3) 施工技術

丁場境 玉作口の崩丁場は複数の大名家にまたがっていた。崩落した築石や栗石等の回収はどのように行ったのだろうか。1月27日に家老から出役する自身衆へ定書^(史146)が発出され、工事の段取りについて指示が出された。昨年現地に預けた残石(築石・栗石)の預け状は27日に上坂する土屋源右衛門らに持たせたので^(史140)、あとから来る普請衆が着くまで玉作口に寄せ集め、栗石の不足分を見積もって早急に調達するよう指示をしている^(史146)。

また、伊東家との境界や落石材の分別についても、後発の下石・小島が来てから相談し、指示を仰ぐこととした^(史140・146)。2月2日の定書では境界にある築石等で帰属が分からないものは両家が相談して決めよ^(史150)と現場に任せている。そのため今年の現場を知る自身を各組から1人ずつ派遣することとした^(史152)。

ここで現存する石垣の刻印分布(図2)を見てみよう^(註22)。竣工後の刻印分布をみると中川家の刻印は境界線より西側に分布しており、石材の取り上げには、崩落位置だけでなく、境界付近では石面の刻印を見ながら選別、回収されたものとみられる。

(東)

(西)

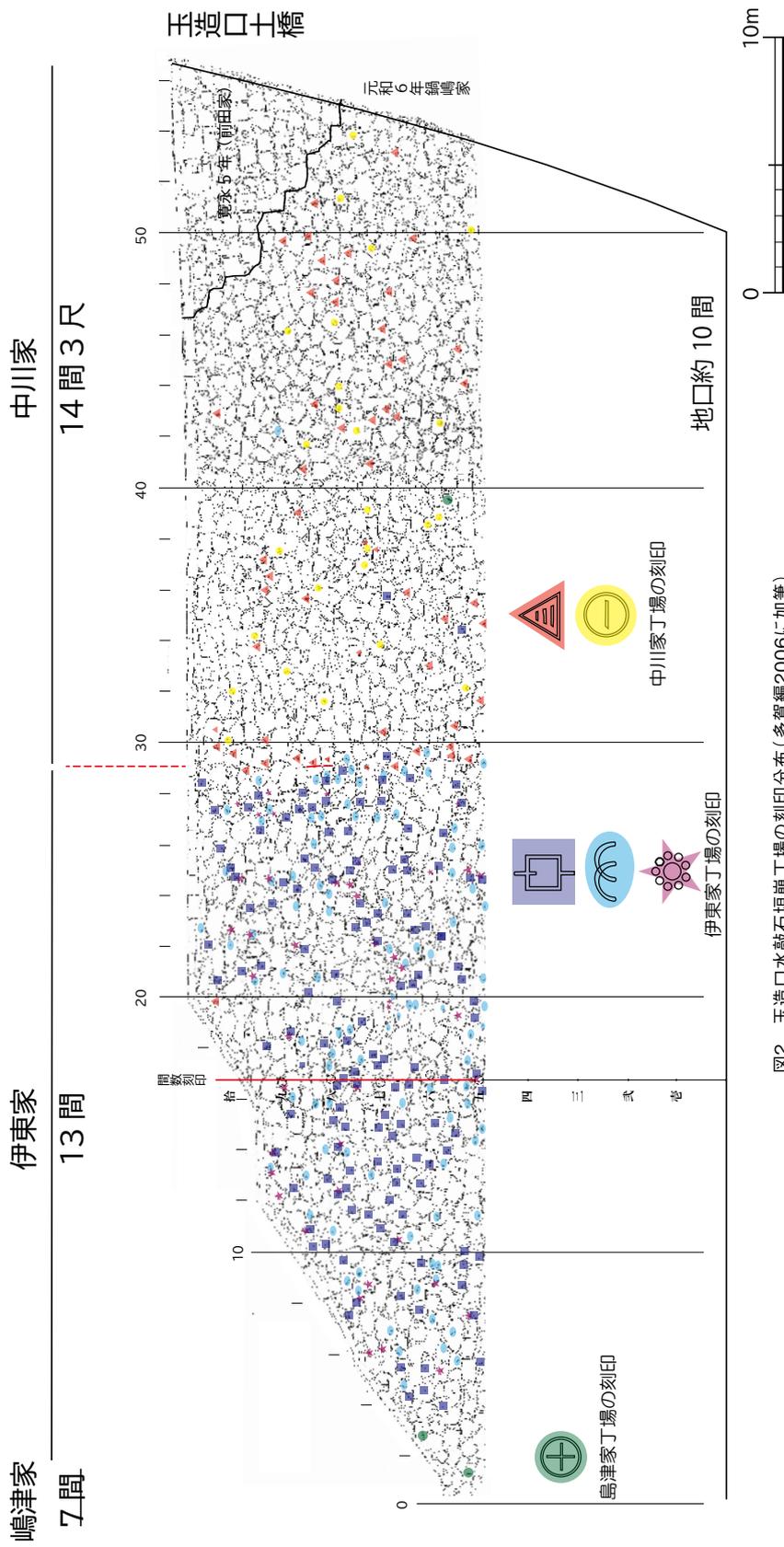


図2 玉造口水敲石垣崩丁場の刻印分布(多賀編2006に加筆)

中川家では第2期工事における本丸西の本石垣、第3期工事における二の丸南の本石垣において丁場境にはいずれも「△の中に三」の大家刻印を上下に連打している。ここでも当初は同様であったとみられるが、現状では中川家の刻印が集中するものの、境目の出入りや傾いたものがあり、竣工後打たれた^(注23)というよりは当初の刻印石を再設置したものと考えられる。中川家ではほかに「○の中に一」が卓越する。この2種は西外堀12号壁にも認められる。

伊東家の丁場は⊕と∩の2種が主体を占める。ほかに九曜紋が目立っている。九曜紋は細川家の大名刻印で、「九」「△」なども細川家丁場に随伴する刻印なので同家から入手した石材の可能性もある。中川家の34～36mラインに伊東家の⊕が2点が存在する。前者は崩落石材の取り上げ時に混在したものとみられる。伊東家との丁場境29mラインにある界線や丁場内にある間数刻印は元和7年の竣工後に打たれたものであろう。

修復の規模 中川家は2月21日、修築は150坪ほどと見込んだ^(史156)。崩落石材等の撤去が終盤となった3月17日に、丁場は地口10間、ならし(天端)「四十五間」(14・5間の誤りか)、高さ11～12間、奥行きは根石部で5間、ならし口で11～12間、背面を山なりに掘削して築石や栗石を撤去していることを報告した^(史161)。さらに元和6年に鍋嶋家が築いた土橋との取り合い(入角部)を取り除いて作り直すよう命じられ、中川家は想定外として困惑した。

根石の設置と土台木 3月3日時点で公儀普請奉行は、根石が残っている場合はそのまま据え置いて、その上に積み重ねよ^(史159)としていた。しかし、現地からの報告があった3月17日前に、根石と土台は取り外し、根切をやり直すこととなった^(史161)。中川家では普請奉行からの進捗が遅いとお叱りを受け、25日までに崩落した築石・裏込め栗石・裏土、前土台を撤去し、4月5日までに根切を1間半掘り直し、根石が据えられるように工事を急いだ。昼夜なく普請衆が出精した甲斐があつて4日には根石設置の運びとなった。

根石設置後、4月12日までに全体の約半分高さ6間が積みあがったことと、石垣背面の作業に関する報告がなされた。それによれば裏込めの栗石は昨日までは石面から5間半奥まで入れられ、現在は3間半と幅を減じ、背後に裏土を入れている。200坪ほど買った栗石は大方がこの分に充当された^(史168)。崩落した石垣の修築にあたり、下半部は幅広の裏込め層とし、上部を狭く裏土と併用している点が注目される。中川家の丁場は4月22日に天端石を置き、2、3日中

に裏土を入れて終了の見込みとなったが、大量の排土の処理がいまだめどが立っておらず、あと14、5日ほどであろうとする。国元へは先に5月20日ごろが工事完了との報告がなされた^(史172)。

このころ、同時に進行していた京橋口の丁場では池田光政が4月10日、毛利伊勢守が4月11日、生駒讃岐守が14日ごろに相次いで根石を設置し、池田丁場では早くも4月15日のうちに隅角部が最上部まで積みあがった^(史168)。根石が座れば築石の積み上げに要する日数は比較的小さいことがわかる。生駒丁場のうち平の15～16間(根切が先行した分、毛利家丁場隣接部)、高さ11間は、築石・栗石を生駒家が用意し、300貫目で日用請負とした(てま斗二而御座候)。4月23日時点で池田丁場、毛利丁場とも積み上げが終わっていたが、生駒丁場は工事が難航していた。生駒丁場に含まれる櫓台は昨年、北側を前田家、南側を生駒家が担当したが、今回は両角とも生駒家が積み直すことになった^(史168)。基礎は根切内の栗石や捨て石を残置し、その上に「かせ土台」として8～9間の丸太を十文字に組み、栗石を充填したのちに土台木を設置した^(注24)。そのことで根石の再設置は存外に早く済んだという。櫓台は直営とし、縁戚の藤堂家から800人の合力を得て工事を急いだが、竣工は6月ごろと取りざたされていた^(史173)。

二の丸東の越前丁場は4月8日に根石を置いたが、土台木が前代未聞の立派なものが敷き込まれた^(史168)。根石から高さ6間までの築石は控えが8～9尺ある大きな石材が用いられた(生駒丁場櫓台も同様^(史168))。修復工事では崩落原因となった不安定な基礎地盤や背面の裏込め層や裏土への対処に注力したことがうかがえる。このような技術面の指示は普請奉行から大家下奉行に伝えられており、史料上、公儀穴太の関与は確認できない^(注25)。普請奉行は公儀穴太に随時意見を求めていた可能性はあるものの、下奉行が直接接触することはなかったであろう。

(4) 経費

1月16日の時点で国元では普請衆150人、残りを日用で賄うこととし、今回の工事のために銀15貫目を差し上せる予定としていた^(史131)。うち5貫目を藩主が、10貫目を家中の割符と見込んだ^(史132)。1月27日に第一陣として出立した普請衆200人のうち、鉄砲衆45人分の兵糧を上坂する自身衆に預けたので現地で支給するよう家老から現地に伝えられた^(史140)。

2月・3日には国元からは先の15貫目に加え、日用100人の経費^(注26)として7貫目(2日に上坂する下石と小島が持参^(史153))とあわせて22貫目が送銀され、銀子不足の場合は国元へ依頼するのではなく、大坂で借銀するよう通知している。さらに先に派遣した小鉄砲衆45人に新たに48人を加え、彼らへの毎月の兵糧米と鉄砲衆以外の人足への兵糧米と大豆の支給について指示をしている^(史150)。

2月5日、国元から江戸藩主・留守居へ、指示のあった300人のうち100人は日用を調達することとし、7貫目は三番(家中組)から調達し送銀したことを伝えている。またその路銀についても三番より調達することを報告している^(史152・153)。

これで順調に進むかに見えたが、3月に入り堀水を落とし、崩落石材の撤去から根石設置に進むと工事が急ピッチとなった。中川家は幕府普請奉行から進捗が遅く、雑であると叱られる事態となり、現場は昼夜なしの作業となった。これにより日用賃銀がかさんだことから、3月17日に国元へ10貫目の追加を要請することとなった^(史161)。急を要するため早舟で下向するとまで言っている。4月5日になって、国元ではその調達に苦慮するも、当面の資金として現地見廻りに派遣する本郷猪右衛門に5貫目を持たせることとした^(史164)。本郷は4日に出発していたが、まだ大阪には到着しておらず、13日にはせめて3〜4貫目の送銀をと重ねて依頼している。21日に算用担当の小原勘兵衛は再度銀子不足の窮状を訴えつつ、同時に竣工が5月20日ごろと報告した。ほどなく5貫目^(注27)を持参した本郷が到着したので、現地奉行たちは船代や買物、日用賃銀の支払いを済ませたのであろう。

4月13日、現地から国元への書状には、将軍からの扶持米として一人につき一日に5合、380人分が支給されることが報告されている^(注28)。しかし、今回の普請では過分に日用を雇ったため、従来の給金ではとても足りないと言っている。これは出人200人よりも多いが、積算の根拠は不明である。

4月23日、現場からの報告^(史173)では、素早い送銀に感謝するとともに、当面2貫目を支払いにあて、残りは足りなくなった場合の補填に使うとする。もしもの時に備え、必要経費を多めに請求したふしがある。5月10日、国元からは最後の5貫目も下奉行らが帰国後に家中で割符することとして指示がなされた^(史175)。元和7年の修築工事で岡藩では、路銀を除くと殿様、家中あわせて都合27貫目を支出したこ

とになる。

石垣の修築に出役した普請衆とは別に鍛冶と穴太には別途切米として米・大豆が支給された。鍛冶は石丁場や普請丁場に派遣され、ノミやセツウ、ゲンノウなど普請道具のメンテナンスにあたる役で、穴太は石丁場で石材の検収をしたり、普請丁場で下奉行の指示を受けながら直接石積みを指揮したとみられる。中川家では鍛冶に長右衛門と源右衛門を派遣し、前者には米納升20石6斗、大豆3石4斗(銀にて40匁8分)、後者には米納升11石、大豆1石8斗(銀にて21匁6分)を支給した^(史133)。穴太の石大夫・又兵衛についても、扶持米と大豆1石5斗ずつが支払われている^(史148)。これらの経費は家中からではなく中川家から賄われた。

(5) 書状の往復

大坂城の公儀普請では国元と大坂、国元と江戸との間で頻繁に書状のやり取りがなされた。そこには往時の飛脚制度の限界によりタイムラグが生じていた。大名飛脚にどれくらいの日数を要したか見ておこう。

<江戸→岡>

・元和7年正月6日に江戸の藩主久盛(柳原)からの書状が国元に着いたのが正月26日^(史152)で20日を要した。ちなみに日向の伊東家では、元和6年閏12月19日付の石垣崩落を伝える江戸からの書状が正月14日に届いており^(史130)、こちらは25日を要した。

<大坂⇄岡>

- ① 2月21日、大坂の下石から国元へ^(史156)。国元からの返書は3月4日^(史160)。
- ② 3月3日、大坂の小島・土屋から国元へ^(史159)。国元からの返書はなし。
- ③ 3月17日、大坂の下石ほか9名から国元へ^(史161)。国元に着いたのが3月30日^(史164)で、返書が4月5日^(史164)。
- ④ 4月13日、大坂の小島ほか9名から国元へ^(史168)。国元からの返書は4月28日^(史174)。※4月21日に国元から大坂へ普請の様子を知らせるよう催促の書状。
- ⑤ 4月23日、大坂の小島ほか9名から国元へ^(史174)。国元からの返書はなし。

これらの内、③では大坂から岡まで13日を要している。両者の往復から岡と大坂の書状は概ね12・13日を要していることがわかる。このように書状のやり取りに時間を要すること

から国元では銀子が不足した際には大坂で裁許して調達せよと突き放す^(史151)。しかし、日用銀が不足し切羽詰まった大坂では早船で取りに下ると書状を送っている^(史161)。元和5・6年は急ぎの際に早船を何度か利用しているが、元和7年は認められない。ちなみに幕府普請奉行らは次飛脚を使って江戸とのやり取りを行っていた^(史156・173)。

(6) 大名家の名誉と幕府への気遣い

公儀の御用で持ち場の石垣が崩れる失態は大名家にとっては最大の不名誉であろう。修築工事にあたり大名家側が将軍、幕府普請奉行の「ご機嫌」をうかがい、随所で気遣いをみせるのは当然のことであった。

正月14日、伊東家から中川家家老への書状には「閏極月八日ニ御耳ニ立申候由ニ御座候、御機嫌も悪敷無御座由申来、先以目出度奉存候、花房志摩殿・日下部五郎八殿へ御内証ニ而御座候」^(史130)とあり、中川家からの返書^(史135)でも、今回の石垣崩落の件で将軍のご機嫌が悪くないこと、普請奉行らが内々に対応していることに安堵している。

大坂で普請奉行らは「相延候へは殿様御ため悪布可有御座候条、内々其心得候てうけをい候へ」^(史161)と、下奉行に対して工事の遅延は「殿様(大名)」が面目を失うことになるので心得て請け負えとプレッシャーをかける。「玉作衆かしかけ普請之由、かげニても御奉行衆の[虫損]被仰之由之間、迷惑仕候御事」^(史161)と、下奉行ら普請奉行衆が玉作衆の工事が「かしかけ普請」と陰でささやいていることに困惑している。「かしかけ」の意味は定かでないが、雑あるいは下手の意であろう。さらに「(越前)宰相様さへ御公儀御大事ニ思召候て御急被成候処ニ、日用頼ミ仕、ぶらゝと仕候ハ、事之外御しかり被成、江戸へ言上可被成旨、てまへ御届被成候御事」^(史161)と、ここでも仕事が遅いことに対してクレームをつけ、江戸への言上を通知している。藩主の名代として現場に立つ下奉行らは、お家の名誉を背負って幕府側との狭間で常に緊張を強いられた。

江戸期には大名家側から将軍、年寄衆(老中)へのさまざまな進物、献上品が送られたが、公儀石垣普請でも献上石とともに普請奉行らに「音信物」が送られた。

元和7年の修復工事で2月2日、中川家では下奉行らの出立に合わせて、公儀穴太・大工への御音信物をそちらで見繕うよう指示している^(史150)。対象が公儀普請奉行や大坂町奉行にとどまらず、穴太や大工などの技官も含んでいたことは注目される。

ちなみに第1期工事では、元和5年11月16日に大坂から国元へ、この度の普請奉行と目される渡邊筑後守の上洛に合わせて御音信をするかと尋ねている^(史77)。同12月25日には上坂していた中川加賀から国元へ、戸田氏鉄(普請奉行・横目)が御影での石切に配慮してくれていることに対して御音信をしてよいか伺いをたてる^(史84)。そして、正月8日には「蜜柑」1,000個を氏鉄に送った^(史90)。

正月16日に中川加賀は公儀普請奉行に長谷部式部・花房志摩守・日下五郎八・渡部筑後・戸田左門が就任したことが、「諸方より過分の御音信」がなされていることを報告した^(史98)。続けて18日には氏鉄が「御横目」に仰せ付けられたので方々から使者や音信が殺到しており、音信は早々に差し上げるのがよいとし、自分が一兩日中に尼崎へお礼に参上するとした^(史99)。国元からは中川加賀に対して、戸田や大坂町奉行衆、京都所司代・板倉周防守への御音信は牧兵部に任せているとの返信があった^(史100)。なお、元和6年の第1期工事が終わった8月16日に大坂から国元に送られた帳簿類のなかに「方々へ御音信之帳」がみえる^(史117)。公儀普請にあたり幕府関係者へ御音信をすることは大名家にとっては欠かせない行為であった。

4. 元和7年の修築工事の組織と技術

(1) 組織

元和7年、第1期工事の修築に集まったのは玉作衆が3家(中川久盛・伊東祐慶・島津忠興)、越前衆、京橋衆が3家(池田光政・毛利高政・生駒正俊)の7大名家であった^(史145)。割普請の丁場に不具合が出れば、当該大名が責任をもって修築するというのが公儀石垣普請の原則である。

江戸から派遣された幕府普請奉行3名(花房志摩・長谷川式部・日下部五郎八)と横目役の尼崎藩戸田氏鉄の指揮のもと、崩丁場の7大名家下奉行と普請衆が参集して修築工事が行われた。普請奉行は元和6年の本工事からみると2名が減員となっている。第2期、第3期工事も3名であり、とりわけ簡素化されたとまではいえない。普請奉行が上坂するまでは大坂町奉行久貝忠左衛門が現場を差配し、大名家は大坂屋敷が対応した。元和6年は着工儀礼である「鍛初」が行われたが、修復工事では普請奉行から堀水の切り落としの指示に続いて諸大名家が崩落石等の取り上げに取り掛かっている^(史159)ことから、公儀としての儀礼

はなかったものとみられる^(注29)。普請奉行は現場の運営・管理の総括責任者であり、技術面も含め大名家の下奉行に直接指示を与えていた。工事体制全体としては慶長期の大名家による「丸請方式」から幕府による「直接管理方式」(木越2012)への転換が鮮明になっている。

中川家では家中の番方組織をもとに3組が派遣された。式部番(田近)・加賀番(戸伏)・隼人番(熊田)である。玉作口が一番丁場では2種の刻印が卓越していた。中川家は元和5年に伏見城の古石垣崩しのほか、御影、飯盛で採石をしており^(史77)、2種の刻印がそれぞれの家中組を標示している可能性がある。伊東家の2種の刻印も史料と照合すると同様に考えることができる^(注30)。中川家では第1～3期の本工事のみならず、修復に際しても老職を組頭とする家中組を編成し、知行高に応じて人、モノ、金を均等に負担していた。公儀普請への参加が大名家にとって軍役の一つ、普請役としての側面を持つことの証左といえよう。

普請現場では持ち場の石垣を段取り・采配上手にいち早く積み上げ、見栄えよく仕上げるのが、幕府への奉公、忠義の高さを示すことであっただろう。大大名はさておき、中小の大名はむしろ失態なく無事に工事を終えることの方が重要で、他家並みにという横並びの発想も見え隠れする^(注31)。現地に派遣した下奉行は相役となった大名衆の丁場の様子取材し、国元へ細かく報告している。実際の現場で中川家の下奉行は普請奉行から工事の進捗や仕上がりについて叱正を受けていた。家名を背負って現場に立つ下奉行らにとっては胃の痛くなるような日々だったと想像できる。

国元では派遣する下奉行らには普請法度を示し、現場管理を徹底することと普請衆の規律を守るために権限も与えている^(史146)。

土屋源右衛門(組頭・公儀に出る奉行)が上役であっても必ず三人の自身衆と相談し工事を円滑に進めること、源右衛門が公儀に出る時は一人で行ってはならず、最低でも一人同心を付けること、と現実的な指示を与えていた。

他所から来た者が騒ぎを起こした場合、「一時的に預かる」のではなく関係者で談合していか様にも処理されてよい。下々(普請衆)が法度に背いたり、他所でも内でも喧嘩をした場合は、その状況に応じて成敗を加えてよい。それ以外の曲事についても、相談のうえで処理してよい。自身衆に対して下々の者が慮外な振る舞いをした場合もいか様に処分してよい^(史150)。

石垣崩壊というショッキングな事態に大名家では参勤中で江戸にいる藩主と国元家老、隣接丁場の大名家同士で活発な情報交換をして対処したが、最も気を使ったのは將軍(秀忠)の「御機嫌」である。大名家側からは公儀に対して大坂町奉行や普請奉行から穴太・大工に至るまで音信物を贈与することに意を尽くした。これらは普請のたびに「御音信之帳^(史117)」に書き上げられ、必要経費として家中に割符されたものとみられる。

(2) 技術

公儀普請で石垣が崩壊する事例は珍しいことではない^(注32)。不安定な地盤に築かれた石垣は完成直後に変形が生じやすいことを示唆する。大坂城は上町台地の先端部に位置するが、二ノ丸の北部は大和川の氾濫原に立地しており、前田家が担当した青屋口周辺は「地心悪所六十間」と懸念されていた場所である(朝尾1976)。元和6年に石垣が崩落した越前丁場や京橋口北側の池田～生駒丁場も同種の地形とみられる^(注33)。玉造口水敲の丁場は裏土が悪く、背面からの水が原因とみられた。

元和7年の修築ではこれに対処する必要があった。具体的には根切のやり直し、土台木・根石の再設置(栗石充填)、築石下部の石材の控えを長くするなどの改善を行ったことが記録されている。また天端の均しが終わっても「のけ土過分ニ御座候」^(史173)と大量の残土処理が残っていたのは、裏込め幅が広がったことに加え、裏土の搬入があった可能性もあろう。

崩落原因の違いにより丁場によって異なる対応が取られた。玉造口は根切りを深掘りし、栗石を入れ増し、土台木は前回と同じ梯子胴木とみられる。背面はまず崩落石材の撤去に合わせて高さ11～12間を山なりに掘削している。4月半ばに約半分の高さを積み上げたが、下半部では裏込めの栗石が石面から5間半奥まで入れられ、現在は3間半と幅を減じ、背後に裏土を入れているという。崩落した石垣の修築にあたり、下半部は幅広の裏込め層とし、上部を狭く裏土と併用したのである。背面の水対策、土圧対策に重点を置いた修築となっている。

一方、地盤が悪い越前丁場や生駒丁場では、「土だい引物、先代未聞の大そうな被仕様ニ而御座候、ね石より六間ハ八尺、九尺の石を以つミ可申旨、御奉行衆被仰渡候事」^(史168)とあり、根切をやり直すとともに土台木そのものを交換したようである。さらに下6間は築石の控え長さを8～9

尺とし、石垣の安定性を高めていた。生駒家丁場では基礎に長さ8～9間の大丸太を組んだ「かせ木」を置き、栗石を充填してその上に土台木を敷いた。ここでは「跳ね木」や前押さえの「捨石」の記述はみられないものの、元和3年、藤堂高虎の関与が指摘される高槻城本丸（高槻市教委1984）で使用された土台木が想起される。

「中川家史料」には元和7年工事に限らず、各大名家の根石置きの日が記録されている。これは根石の設置が工程上、石垣構築の節目となるばかりでなく、技術的には石垣の安定性を左右する重要な工事だったからであろう。幕府奉行衆が根切や土台木の状態を確認し、その指示のもとに根石の設置に取り掛かる必要があったからである。元和6年、幕府技術顧問の立場にあった藤堂高虎が前田家の青屋口丁場の根石を検分している（朝尾1976）のもそのためである。寛永元年、二条城外堀工事の際に尾張徳川家が普請奉行の指示を待たず根石を置き、取り外しを命ぜられたこと^(注34)がある。石垣の安定性にとって根石が重要なことは言うまでもないが、低湿地では特に普請奉行らが嚴重にこの点に留意したことが分かる。また、この頃には幕府が一元的に工事を監督していた実態も見て取れる。

5. まとめ

本稿は、徳川期大坂城の第1期工事（元和6年）竣工後に崩落した3か所の石垣について、翌年に行われた修復工事の経過をトレースしながら、主にその組織と技術について論じたものである。公儀石垣普請で担当丁場の石垣が崩落することは、大名家にとっては不名誉な出来事のため藩政史料にその記録が残ることはほとんどない。そのなかで豊後岡藩の『中川家記事』は編纂史料とはいえ、当時の関係者の書状のやり取りを収録した稀有な史料群である。

本研究を通して下記の点を明らかにできたものと考え。

普請に参加する大名家は家中の番方組織を基礎として普請組を編成し、知行に応じて役（ヒト・モノ・カネ）を負担した。中川家は3つの家中組（譜代の家老が番頭）に足軽等の普請人を組織し、工区割して工事に当たった。必要経費は藩主家負担分を除けば家中に割符され、給人らは封建的秩序に基づき「公平な役」を負担して奉公した。この点は細川家や黒田家の普請組織とも共通しており（北野2022・2025）、ある程度一般化できるものと考え。公儀普

請への参加が組織面では戦国期以来の軍事動員の形態をとっていることは明らかであろう。

2点目として、大名家の費用負担に対して幕府が普請人の扶持米（5合／人・日）を支給している点である。これは公儀普請があくまでも幕府主体の事業であることに由来し、徳川政権初期からの慣例であった。直接労働力である足軽らには日常の俸禄とは別に藩からの手当^(史150)、幕府からの扶持米を換銀して支給される分と合わせるとそれなりの収入があったことは疑いない。小鉄砲衆や穴太・鍛冶についても同様である。

大名家は持ち場の石垣が崩れてしまうことは幕府に対する奉公の責任を果たしていないことになる。大名家がすべての労働力や経費を負担して修築にあたることもありうるが、ここでは幕府が普請奉行らを派遣し、元和6年や寛永期の本工事と同様に扶持米を支給したのである。確かに公儀普請で大名家側が負担した人的・経済的リソースは少なくなかったが、それを大名家の経済力をそぐために計画・実行したとする理解は単純の誹りを免れない。

技術面では崩落原因になった軟弱な基礎地盤や背面地盤への対策（根切・土台木の改良、裏込め幅の拡大など）がはかられ、築石の控えを長くして安定性を高めていた。公儀穴太の役割は史料にはでてこないものの、改良点は普請奉行を通して大名家の下奉行に指示された。

本稿では元和7年の修築工事のみを対象としたものであり、今後は寛永2年の修築、寛永5年以降の修築、大名家を介さない（商人請負による）日用普請についても検討していくことが必要となろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり下記の方々ご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。佐藤章洋（竹田市歴史文化館・由学館）、櫻田小百合（大阪市教育委員会）

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)（一般）「公儀城郭普請の生産・管理システムに関する考古学的、歴史学的研究の融合」（課題番号25K04459）の助成を受けたものです。

注

- (1) 第1期工事前に日用普請があったことが内田九州男や中村博司により指摘されている(内田1982・中村2009)。元和4年正月23日、大坂詰の牧兵部から国元家老へ、今年は公儀普請の沙汰がなかったこと、昨年幕府は大坂・尼崎・郡山・高槻の城で堀の工事を実施し、石垣工事は銀子をもって今年中に完成するよう命じられたことが報告された。そしてこの石垣の出来栄は、日用普請とは言えないほど見事なものであったとする^(史43)。牧がみた石垣は大坂城のものともみられ、本記事も第1期工事に先立つ日用普請の存在を示唆したものといえよう。中川家では元和6年の工事を「玉作石垣九間程築直」^(史114)と再築であるとしている。堀尾家の史料にも「御町場石垣崩申候儀、水きわより根石まで二間半余御座候」とあり、先行する石垣があったこと(『松江市史』近世史料編Ⅲ、p58史料45)が読み取れる。
- (2) 伊東家の事績を記した『日向記』には元和7年の修理工事の記録はない。池田光政に関して、江戸後期に岡山藩士大澤惟貞が著した『吉備温故秘録』巻18では、元和6年から始まる大坂城普請で日置豊前・池田下総・土倉市正・若原監物の4名の老職が交代で大坂に詰めて奉行したとする。元和7年の補修工事の記録は確認できないものの、家臣の家譜にはこの工事が寛永元年までの6年に及んだとあり、大澤もこれを追認する。元和7年工事および、寛永元年工事の石材調達、準備も含んだ認識とみられる。
- (3) 元和9年、忠直は乱行を理由に藩主を廃され豊後に流されたため、この修築は第2期工事の組頭大名4組に割符され(「越前丁場来年罷退申割符之覚」『熊本県史料』近世篇第三p751)、寛永2年4月11日～6月20日にかけて行われた(『綿考輯録』第4巻p117、『中川家記事』史294)。3月中旬に奉行衆より仰付があり、着工前に堀水の切り落とし、石道の橋4筋がかけられた(『綿考輯録』同上)。この時は越前丁場の南側が対象で、国立国会図書館「大阪御城之図」(石川県金沢城調査研究所2012)では、石垣面に斜線を入れて範囲を示している。本図には堀尾・山内丁場も含め、寛永2(乙丑)年に修理した箇所「申年」の注記がある。なお、修築箇所は一部毛利家の丁場にも及んでいた。
- (4) 『福岡県史』近世史料編福岡藩初期(上)史686
- (5) 第1期工事で玉作口東側は鍋嶋組の大名が分担したが、その中に一人だけ池田組の中川家が入り込んでいた。計画図(山口県文書館蔵「大坂御城普請ニ付而諸大名江地口坪割之図」)では鍋嶋組の堀尾家があてられていたが、何らかの事情で変更となっていた。

中川家は玉作口水敲14間3尺と西外堀水敲2間(12号壁内にある隅角部2か所の埋め殺し。淀川へ堀水を落とす余水吐か)、一番櫓下本石垣7間(53号壁、寛永5年前田家再築により確認できない)を担当し、玉作口を一番丁場と呼んだ^(史117)。
- (6) 崩れ残った石垣に隣接する中川家と島津家の丁場では、西側の土橋入隅の鍋嶋家丁場、東側の石川家の丁場との取り合い(すり合わせ)をよくするためそれぞれ一部取り壊して積み直すことが命じられた。中川家では普請が思いのほか多くなって「迷惑である」とする。
- (7) 第1期工事の普請奉行は長谷川式部少輔・日下部五郎八・村田権右衛門・渡邊筑後・花房志摩守が務め、ほか戸田氏鉄(尼崎藩主)・藤堂高虎(津藩主)が総奉行の地位にあった。元和7年の補修工事においても戸田は1期と同様の役割を担っていた^(史161)。第1期工事の普請奉行衆のうち、渡邊と村田の名は見えない。
- (8) 9月12日付、藤堂高虎は家老采女あてに、役儀の者を召連れ至急、津に帰り待機せよと命令している(久保2005、p329)。采女は4月には800人の普請人を連れ生駒家の崩丁場を助力していた(史168)が、讃岐へ派遣する組の者を9月を期限として工事を終えるよう指示をしている。これは元和7年6月15日の藩主正俊(高虎の娘婿)の死去に伴い、若年の高俊の後見として高虎が生駒家の内政に関与することとなった事情によるものであろう(久保2005)。采女らが第2期工事に向けた石丁場にいたのか、大坂城の工事が6月中に終わらず、9月まで長引いていたのかわからないが、難工事であったことから後者の可能性が高いと考える。
- (9) この時点では第2期工事が元和8年に行われるとみられていたからであろう。
- (10) 文中からこれ以前に普請人の数と出立見込みについて書状が送られており、これが2通目となる^(史130)。人足は伊東家が300人、島津家が150人と連絡している。石垣崩落の件に関し、幕府普請奉行花房志摩および日下部五郎八が内々で処理されている(將軍には未報告か)と書かれている。
- (11) 野崎十左衛門は『日向記』巻第13「祐慶主所々御普請事」では「幕府奉行」として記載されている。
- (12) 隣接する丁場の大名家間で着工前に情報交換している例は第1期工事でも確認できる。堀尾家と山内家は同じ組に属し、東外堀の隣接する丁場を担当したが、元和6年4月28日、堀尾家家臣から山内家家臣へ、国元から大坂へ上った出役人の数や、以前の石垣(豊臣石垣か)が1/4ほど崩壊している様子を伝えている。両家は慶長19年10月27日、堀尾忠晴から山内忠義あてに家臣の召し抱えに関するやり取りがあった(『松江市史』近世史料編Ⅲ、p58史料43)。大名家は公儀普請をスムーズに進めるため、地縁、血縁等の縁故を利用して様々な情報収集活動を行っていたものとみられる。
- (13) 慶長15年の名古屋城普請で、中川家は現地で石切の最中、急遽普請不参加を命ぜられ、確保していた石材を光政の父である池田利隆に引き渡した(入江2014)。池田家の家老に指導を依頼しているのは先代からの血縁を頼りとしたものであろう。その後も中川家4代目藩主久恒は池田光政のむすめを妻としている。
- (14) 穴太と鍛冶は石丁場と普請丁場の両方に派遣された。万治元年の江戸城本丸中仕切石垣の普請では派遣したお抱えの「石切」とは別に現地でも「石切」を雇用している^(史458)。この石工がいわゆる「穴太」にあたるのか、加工専門の石工かは定かでない。
- (15) 自身は3番組(式部番・隼人番・加賀番)のうち各2人、崩れた石垣の境界確認のため昨年の出役者のうち一番より1人宛派遣するという方針で選抜された^(史152)。
- (16) 山本左太郎は栗石・鍛冶奉行、池田助三郎は日用・万買物奉

行^(史142)を務めた。山本は第1期工事では御影で石場奉行を務めた^(史65)。

- (17) 工事が急ピッチとなった3月末時点で現場で働いたのは、1月27日に現地から派遣された200人のうち、賄いや雑用を除くと166人であり、全員が普請場に立っていたわけではない^(史161)。第1期工事では214人(うち鉄砲衆34人)が出役した。伊東家、島津家は元和7年正月段階でそれぞれ300人、150人の予定^(史130)としていた。10間で200~300人が目安となっている。
- 崩落規模は玉作口の中川家が10間、東外堀の越前松平家が35間、京橋口の池田家が15間、毛利家が4間、生駒家が15~16間とされ、池田家の派遣人数が極端に多い印象を受けるが、10間に200~300人程度の人足を要したことがわかる。
- (18) 元和6年には石丁場に派遣された中間29人分について兵糧を渡すように家老が下村に指示をしている。昼食をはさんで作業した日は支給することになっていた^(史93-94)。
- (19) 鉄砲衆の派遣は各時期の普請でみられ、鍛冶とともに兵糧米が支給されている^(史71-78・150-302)。元和7年12月の上方派遣(石切)では一人一日5合という基準が示されている^(史207)。元和5年の石切では小鉄砲が34人派遣され、兵糧の一部として一人に付き手当が300匁支払われた^(史69)。鍛冶も石丁場に派遣され兵糧が支給されている^(史73)。
- 鉄砲衆は組足軽の中でも土木工事の精鋭部隊とみられ、石垣普請には欠かせない存在であった。中川家では「小鉄砲」と一般に表現するが、元和7年工事に際して「てこのもの四拾五人」^(史132)、「御鉄砲衆都合四拾五人」^(史140)と言ひ換えているので両者は同義とみられる。「てこのもの」は手木者(手子者)であり、手木棒を操る石工事に長けた集団とみられる。
- (20) 元和7年の修復工事では、伊東家で「国本よりハてこつかい自身等之罷上」^(史125)、越前松平家で「御秘蔵之御そは鉄砲衆八百御座候」^(史161)の記事がある。「萬治元年江戸御本丸中仕切御石垣御普請覚書」によれば、岡藩は普請初めから終了まで、石切100人、手木者100人、日用200人を召し抱えた。お抱えの手木者や石切には賃銀と扶持米が支給され、商人請負の手木や石切には賃銀が支払われた(「御年譜草案便覧」N194)。
- (21) 派遣される下奉行は一番組から2人ずつという基準で選抜され、崩壊した石垣の伊東家との境目の確認のために各組1人が派遣された^(史152)。
- (22) 玉作口水敲90号壁の石垣は現在立ち入り禁止のため確認ができない。刻印等の分布は多賀左門編2006の図をもとにしている。
- (23) 京橋口の毛利家丁場では竣工後の石垣に大名刻印が連打されている。一部傾いたものもあり、すべてが新規の刻印というわけではなからう。丁場境の刻印の連打は普請奉行の指示ではなく、大名家側の意思によって行ったようである。
- (24) 不陸を調整する「かせ木」を丸太で十字に組み、その上に前後の土台木をおく高槻城本丸跡で出土したような構造とみられる(高槻市教委1984)。
- (25) 元和6年の大手門脇の黒田家丁場では、不測の事態に公儀

普請奉行の指示のもと、黒田家下奉行・穴太小河長右衛門らが現場で話し合いながら対処している。(『福岡県史』近世史料編福岡藩初期(上)p112)。

- (26) 中川家では大坂での日用銀を1日1匁と見積もっているが^(史136)、元和6年の黒田家では山からの石出し等に一人1匁3分、修羅引きに1匁5分(注24文献)としており、割安となっている。中川家は第1期工事で採石に難儀し、日用を雇っていた。元和6年正月には石丁場での日用賃金が一日につき8分~1匁^(史88-89)であり、元和7年正月には大坂で1匁、伏見(石垣崩し)で5分と定めていた^(史136)。2月21日、現地からの第一報では、現時点では栗石の値段や日雇の賃金(今日まで七分、八分)が安価である^(史156)としている。
- (27) 当座は「御姫様銀」からの借りで賄い、3貫500匁は家中の調達とし、国元で割符して後日徴収することとした^(史162)。
- (28) 扶持米の積算は役高を基準にするものと延人数によるもの(堀内2022)があったが、大坂城再築では後者がとられた。中川家では3月分は淀の蔵米、4月以降は大坂の蔵米から受け取るようになっていた。一人1日5合は慶長9年の伏見城普請から変わっていない。
- 幕府からの扶持米は、寛永元年12月に300俵支給された記事がある^(史293-294)。ここでは寛永2年の越前崩丁場の修復にあたった扶持米の実績があげられ、4月11日~6月20日まで、延人夫数478,220人分、一人当たり5合で1,391石1斗が支給されたとある。大名家の惣知行高は458万894石5斗で万石あたり5石2斗7升余。中川家は半役で18石4斗4合5勺が割り当てられ、配分のために銀に換算(14匁2分/石)すると261匁3分4厘となった(『中川氏御年譜附録第四』)。この史料には普請人や扶持米の積算に関する注目すべき内容があるがここでは立ち入らない。
- (29) 元和6年の本工事では3月1日に鉄初めが行われた。元和7年の修復にあたり、普請奉行衆が大坂に入ったのが2月27-28日^(史159)であることから、本工事と同じく3月1日をめぐりに着工と決まっていたのであろう。
- (30) 『日向記』巻13によれば、伊東家は元和6年の普請に2組(組頭は川崎大膳、伊東主馬)が出役したとする(宮崎県1999)。
- (31) 元和5年10月、第1期工事に備え上坂した責任者に対して、国元から細かい指示ができないので、他家の普請準備を参考にしながら自身衆で協議し、万事うまくいくようにと指示をし、何か変わったことがあれば、早船で下り詳しく状況を報告せよとしている^(史72)。
- (32) 北原1999には元和6年江戸城普請での上杉家丁場、寛永13年江戸城外堀普請での細川家丁場の崩壊例が紹介されている。
- (33) 本丸北部の山里曲輪では128号壁と129号壁(前田家丁場)の石垣が下部で大きく孕んでいる。軟弱地盤あるいは水による背面土圧の影響とみられる。
- (34) 寛永元年、二条城二ノ丸石垣の公儀普請において、普請奉行の指示を待たずに根石を置いた尾張徳川家に対して根石の取り外しを命じた事件があった(北原1999)。

参考文献

- ・朝尾直弘1976「『元和六年案紙』について」『京都大学文学部研究紀要』16
- ・石川県金沢城調査研究所2012『石垣普請の技術と組織』
- ・入江康太2011「岡藩初期上級藩士関係資料について－中川家文書『諸士系譜』から」『竹田歴史資料館研究報告書』平成22年度
- ・入江康太2014「名古屋城普請と岡藩」『竹田市歴史資料館研究報告書』平成25年度
- ・内田九州男1982「徳川期大坂城再築工事の経過について」『大坂城の諸研究』名著出版
- ・及川亘2022「『名古屋御城石垣絵図』を読む」『史料が語る名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究センター
- ・北野博司2022「徳川期大坂城の石垣普請における大名家中組の編成」『城郭史研究』41号 日本城郭史学会
- ・北野博司2025「筑前黒田家が参加した公儀石垣普請」『学究無限』吉岡康暢先生卒寿記念論文集
- ・木越隆三2012「徳川期大坂城石垣普請の造営組織と大名組の役割」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
- ・北原糸子1999『江戸城外堀物語』ちくま新書209 筑摩書房
- ・久保文武2005『藤堂高虎文書の研究』清文堂
- ・熊本県1965『熊本懸史料』近世篇第三
- ・財団法人西日本文化協会編1982・83『福岡県史』近世史料編福岡藩初期(上)(下)福岡県
- ・白峰旬1998『日本近世城郭史の研究』校倉書房
- ・多賀左門編2006『大坂城石垣調査報告書(二)』築城史研究会
- ・高槻市教育委員会1984『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』
- ・竹田市立歴史資料館編2010『『中川氏御年譜』とその時代展』
- ・竹田市教育委員会編2011『岡城跡石垣等文献調査報告書』竹田市
- ・竹田市教育委員会編2007『中川氏御年譜』竹田市
- ・中村博司2009「大坂城再築の経過と普請参加大名の編成」『大坂城再築と東六甲の石切丁場』大阪歴史学会
- ・名古屋城調査研究センター2022『資料が語る 名古屋城石垣普請の現場』
- ・堀内亮介2022「名古屋城石垣普請における扶持米給付－扶持米請け取状の分析を中心に－」『資料が語る 名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究センター
- ・宮崎県史編纂委員会編1999『宮崎県史』叢書日向記 宮崎県
- ・村川行弘 1962『大坂城と芦屋』芦屋市文化財調査報告書第2集